允中挿花鑑

天

瓶中挿花鑑序

挿花の枝(こぶ)まゝ生(なま)て来花にしてあれば道
祈る花にしてあらば、むかしは佛に奉れる香
華なれば、さもありけむ、其義は本縁
の流れにも花あれば、延喜式に金銅の花
瓶削花なども、古今後撰などに、瓶
にさせる桜花あれば、絵などに削花もあ理ば、
このく佛にのみ奉りし又さての人にも字

深くめ流るあるまで、於て瓶よりも活てきたよう
ぜざるまで、これ字設け、巧字不云事ハ三秘、
る箇の條目をたてゝ、佗法字定め志すこ、
文安乃法よりの後、室町殿の同朋富阿
弥相阿弥能阿弥なども、ほまく　考
なせるにや、あらそむ、所る君臺觀左右
帳記、仙傳抄、相阿弥口傳、などよみ事、
併のく思ひているゝ策わざなるまゝ、大系の

法よりまで陸ありて、八、花の會せず行きされ、七
夕ま七瓶の花字手向くる事など中
え、六角堂の後行池の坊氏専慶、
その和ざ和当まゝくく、立花と云る様やう
字さく巧出るまで、活て今の世までも絶ず
侍るの、終ふ行ハれて、これ字設ぬ家居
おほくたまを兄ま孫ざぬ人稀なるの、武花乃
多西の郡乃霞ヶ關の舊蹟ま住ける

相澤の老翁、なにくれにくしの庭ぬ中で
とふ此ころに考て、瓶中揷花鑑に著
はし、人〻はけとさむとまゝ、ふの门人あつまり
て梓に意ふるを、ことにおもやくふくて、余にのは
しきにいふ、余おもくらく、揷花、茶術、
俳諧、狂歌の類、こりふれぬにふ似しみと
云ゑども、民に軌物ふいるものゝの教乃
端りて、佛にかぬといふ衆生この

佛乘の車にかわす、道ふまて業はる
ましく、儒にのみといふは、天子徳にして
車と治るをやくまく、孫る一技ながら、常、
民のに治れり乃まで、たゞるべき道り
入立ずたにある旅まで、代られ聖主賢臣
も、ふかごのこまかものに見えーしたまくるり
これ、又ならくらく、諸藝捨ずまことのなるく、
されど嗜好に深くれまで、家に傾るまる。

緒道是つよみなくば、これど固執に引
かれず、才字迄まで至る、名に殿中に執
て心志し深くなむある、されば予て
だてふいなみはつ莫くぞかくやす。独
ま草子をあらはせる書、華頂殿の倭學士
平小山田與清

間宮永好謹書

自序

[illegible]

[illegible]

なミ乃生て流かくちる本ゞ気枝ふゝ乃
つ〻まよりも取出るゝわきへ流ゝさゝを
ふとそれ〻ぶりむきあらに亦その尾残
まうなし者流ゞ乃ふ〻この状ふり候そして
こゝちよきあらむかれにしてよき砂乃
かたつけれども花弁乃そこ添けるゝあ
せう人乃やうに故乃このまゝもへてきめかは
まゝ氣乃甚しての末のよかるて形生中乃

清めて汲つけそゝ々とおしもすゆるかてさ
本すらる流者それ体をはしらゝい花さて
まりきゝおもよろてもかいつけ忘すて者乃て
去ゝ余ふ何に者るとしかも取乃挿花体求むる
ふ乃もとのゝ亦まゝ体を流るを形を以て
そつしるふるのしたるもらに久しされは
いふゝそとゝかつしてきて乃れふおふて花ふる残
し持ふむらす免て此花ふゝ乃きするさゝゝ

えだをくはへてくるもよしとしさに、ゆらぎて浮葉の枝葉まで指添

を瓶ちかくはさしてみれば瓶口を隠してこそのあしらひ手段つ

しと知るべし

○大小まじへて六七尺にたらぬにしてはかり小花をもちふることなれば

もちゆることなりし、図にも大きなる花をちいさくつかひより小なるを

用ひて大きく図にも知るべし、そのゆゑ紙面の限にはよらず、これは烈に知る図の限

に合ぬ事性の大小の論にはあらず

○花形の寸尺の須ならん、遠近の生にて論ぜずあてられその月

の挿花はつねの前後にかゝはらずつくるなり

○花挿たる亭を地名亭号にてよばふる其人の名一て

さしたるべきなし

伴主ものにふれしは花形凡之百除指に及ぶ緣にあらさんと

欲すとしてもつの形容にして其形をつくらんとはゆるさゞるなり

○花形とて伴主ごのみ写しとはなす也但画すずなれば筆拙く

ここは知るて唯其業を先だつるとしとはのこふくにては挿花の要旨

とまて筆をつけなれども笑ふへきの所までは花形をもて一枚一葉の居

たりとしもおのれたゞひとりよりて一件の形を好むまゝ眼に図するに、

代筆にまかせらるれば画図をもととなりとし挿花の肝要旨矢

ことゆり平そのたがひしゆゑば筆の拙なき恥ならずつこのる

図と知るべし

允中流挿花鑑

瓶花濫觴

嗜山樓
相澤伴主著

夫我國の挿花其をこしへ絶たへかぞへかたし凡千歳の昔より浮生
しらのなる條しく然して元より瓶花の書挿花の生をさまざまかき
たる書多しといへども只席上の飲具として賓客饗應の設と
しるのみにて其の本意をしらざる其身をさる者はふかく秘蔵し
たまひし挿花の傳書ありて文安の頃より世に弘まり天國にて
是が挿花をさまざまに秘事の傳授ありて然るに其事に用ひ
禮式去凶の禁忌のみおほく風雅なるなく挿花の本意として

なりハ飾しきをもてあそばれず鶯ハ夢山辺ハ花よりまこと家の中ハ
郭公よ草の葉におきそふ露の何れも塩山のもみぢ葉
月に嘯く廉の声峯の松風滝川の音まで皆友と
して浮世ハ座に更まで座に居ながらせばまことに安く清らこの
みて身体も津に取ても及ばず治もおそろしず百歳の寿も
保てるゝも知れぬるべし然るよりそれぞ逸たる隠者の
ごとくして世ハ中の人ハおのれおのれが其趣なきにしく
まれて身ハ遊山をせんとて山にも住みまで野にも棲みれば
市中ともの住家の庭に野山の気色をうつし石たてて
木を植水を求ぐらしておのれ暇あるごとにそれを翫
て忘れし我皆も深山幽谷にまでもおもふ心なれど世にこえて

家をば順なりとも又人に庭がなさればできぬもの又それなれば手軽
にして野山のもの生をもて瓶に挿てかたよりはひろくするれば別て
ひまをつぶさせられし間も利取競争をも忘れて気もの
これが挿花を取本意なりけりされば又気を順にかなひて己が
この弟流生花をなりとも家をやすんとあつかふて或を賤し
酒食をなすべし又ならぬに専にしてならぬもの心をしくなれ皆の身を傷
ぬよう山に居て愛し生花などを争競ともなく又実に家を
守らみ身一なり挿てこれ己が家を守ちたる器用にあれば己が
他にうちてなくなることのみにてなりぬ然はば家本ハ性を
なからひ能よく是ハ又にこのしよるにかれども忌
嫌うるてなき本能に家を守る挿に挿てなれと

其肝意を知て学び得たるよりハ又師たる人も人に教るとて未熟なる師に学ぶ八無益にハまさなしとなり始よりのうぬ風にまなび漸心付て見るによりあしく其毒ことに拵る念ありしのなりされば此道にくらんとも人まで有ことに知ちめもいかん文に学ばんとも人以前の心得なく人まかり挿るも雅なる風と俗なる人風ともに俗なる風なれ学ばれ是とんおもし俗になりて見易くし賤しき物なれ好むものにならず事さへかたならぬ事なるべし

初学之心得

挿花をバ学び初には急て其故実誠の伝をし尋ねとも探る事を好まれず残学びしよりた次にはあし人をしたれの人をこそよそなる学び得

さらにしれなり先その手ぶり残し学び得ても後ひて其故実を残し問ふべきやうなく其諸ての手の業の出来ぬ所には随て次第に能き所ある師のなりよき伝るが傾なりあまり手を出来ぬ者のいはれ故にいふに伝ふへきすなはち残強て伝へ得もしらぬ事のふしぎと惑ひしれなり又訳を知りても手及ぬよりて故実をしれてもちかひなる人によりてまさりて出来ぬとし金銀をつひやして伝をこひもとめられ挿花の事たれつくしと思ふ人も又その数百巻の秘書を持かとてもそれ抄ちん急てさらに其功なかれなるたとへば名録を手に持名作の具足残すれにてよりて器をはちずかは功もなくあらずて目落て未熟にて筆跡の拙き残伝へられたとて見事にも書ことしちごとふかくしれども事の訳を知らずとも徹すの利きもの

見るにたれまやといふ人ありそれとも葉形は分位にあるてで不理屈
なり取りし儘花枝を其儘挿入置ば枝葉もしほれて地に生ひたる時の様
にかはりぬもの也然れば勢ひもぬけ風雅もなく徒に時の戯に等く器
野草たらむにもあらぬなり其姿野山にある草木がまれなる枝なさし
葉をも茂らせ勢ひよくさし出たる生て行人も立とまり枝ぶりして
善からざる葉を茎にもあらぬ流がぬるて器にも生しめ人の
目にかゝらぬなどは挿の手の漸なきにて枝葉の天性を失ふなり
勢ひよく見れば一ふさしかなひて見れば器をも室に比ぐ流なり故
に挿方はあらましかたにいふなり是草木を造化の自然
にて百卉群草其形異なり其をのみて生ぜしの形を本とし
て取りし流枝の趣に随ひ一瓶の形を見て精気を損ずる人は

まふにて拵へを見ぬ瓶に挿せば挿ながら知らぬ人がありしに習ひ勢ひなく
生出たる瓶にこゝらにて器の順なり其一草が肝要なる枝なき無理
に曲枝を生ぜしかまちなく造りの瓶に似しく挿し流をも不見る人も
是を見よ風の詠むし知らで草木のみにくて生ぜし細の曲くれてある
なき賞なる流にて俗情の云ふしきなり論なる流にさらざ亦生花の性
曲るもの形まで何なりし曲に挿てもくるしからざれど生々に背ぬ
枝をいふに二つ三つ花枝葉の天器を得て生出し流枝葉居まる
草葉もおのづから生ずる原のまゝ根本の出る所と之れの別なき
亦くりに組合成て生ぜぬ形とも崩して組合挿ても生
又十二月の時節に趣のかたちをもて之れなき離ぬと自然に
背むく性ならで知るまじし是其一つなりけり梅をもて先

さくらをはじめ梅もゝ百花皆其性剛柔曲直同からず是て
自然の趣なれば亦藤花紫藤や渓蓀なども似たる
なれど趣かはりて花園に生ひ添ひし枝振の和らかなる梅もまた
強き枝振の柳にても何ともなくなれてこの味をうしなふなり これ
天性の質なれば是なり人の手段にてなく曲挽で柳が水楊の如に
作るも梅の如くに成して渓蓀が菖蒲のやうになして見るもの己が
心にそのむ趣にて強て曲挽るに亦是にてかれの枝が其性なかるぬるかして
其趣に何よりも名の枝がふくれたなれど其ものと枝葉にも及ばず付てさまくたる形了
心得て挿とも何時挿ても同趣に出来て何もかも一ツ
柄になれども生性にまかせたるがひえてまた絶がなるなり花にも出生了
たらぬ柄にさしても其色し紙のたくさんなく枝の趣に随てゝ

趣向を定めて挿ても幾遍挿ても同趣に出来ぬものなり是又
其一ツなり亦此道を初心に教る役なれども恵枝に名を付細工物の
花に教れば其が何時迄しも直て生花に教ゆ流派の味をうしなふ気うす
かくし我とも各々役に一ツ二ツまで名づけおきし後の病になるなら
ぬものなり譬ば一と心に定めてよき陽枝にて本なるならば幹なり
葉にてあるならば其方の葉なり二ツにては陰枝にて本なるならば横
一指出す中央の大枝なり葉もこのなるならば横に類たる葉なり
留とつて本なれば下枝なり葉にてあるならば株の間に生添ふ縁を胴
葉なり茎立の葉なるならば控へ葉ある又是を根に生添ひき草なり是
其後いつて見合なれば従に一二留といふ事を別に趣に名の定てなくの
添ても其に何らで趣のよの花に出来ても一件が能あるよく見れば其で

よろしき所なりけれども此事に教ふるに先此三ツが大概なり定るもと
なればかりに名付の書似別条曲直其究なし其ことのに依て
機に依て種あるも絶に依て変たるも或は曲るも多き也
かすくし長くも短くも花に依ては跡ある所にしてもなし
にして勢よく鮮に挿べし夫がまた其整たる勢とまいて
又枝の少附て見に品れ花に挿て花ある枝多く挿
と見て鮮にも其品に挿と成ぞ大概な挿るなり
やちなれども大概でありに心を込て挿る流を能て競に従て
何事とも一の心を加へて挿る處が肝要なり夫が一作の説にて手
に於ても末にさてしかれども其説と末の挿する趣を考て
ふれかれて詞にもつくされて其花に除て師にとくべしやまとの

深き所にて詞にては述がたく執心なれば言ずして教覚さして
其心を得べき事なり初心の勢を見にして究なしといふことぞ
出ぬる究の所の奥にしてもあらずして夫を私の理にていふなり
あらずで花勢におゐて必出よ見所がさなり夫がその所にては
一作の勢を探て窺し是事を見て見の禁ずる所にして
其花勢において何事といふにてまさしく流所にてもなきなり学て知
るべし若人間私の理屈を以て禁忌を立て風雅の上に其と思ふ
たらむで見るべし挿花の手にて何でもなく理にもなくて其勢外
なくのなし挿花にて何程長き枝にても何程重き枝をも
挿居るる事を学ぶべし深なさし或るまにして枝根を繰
などてら見まじなさで水中論なしとすても水中に

が鮮に出来れバ花形も実に見て出来ぬなり　必細工など用意なからまで
先挿方ハ心得ていふまでもなく何程に書たとへばとて夫
にて譬古の出来るそのうへにてはらで何流なりとも其師によ
てまなぶべし　大形や花器つかふにても立てし花器つかふとも が
肝要なり枝葉にいたるまで花に心を入て十ふんに花器はよくつりあへば
形芸操して見ぐるしく精気なきまで枝形花と花器
つかひかたにたがひ花器されバつかへんとてこれ切る者あり
花の風体義るべしとてつけて挫なり花にて多くあれどよし
その花器ばかりやうにい見ぬひよくつけての事一なり
賞翫

挿花を翫ぶに珍奇得難き花など価高く貴し人ぞ労してとり得
たるは遠くより大層なるとふして力に及ぬしるしなど強て求めなど
心を労して風雅にてはなくて是よりぞとり易き物の中にて善
物を撰取て賞翫なりとは又珍奇物なりとてさして諦し有れ
物ぞ価高くつゐやし求取ても其物をば愛ちし他にて何るで価ぞ
借まで求取たりと名聞に似たる様なり亦客に供ちし他にて其時ア
る物の中でよき物を撰用るは饗応の其一なり晋同物が其中に
耳らし他に珍きとて客に供られまで諺にいふ藪から棒にて客に
居当他にて聞て失礼なり尤に客賞翫の為にて当季の物よりに
限るべし　東都の花肆にて正月麦の稲の生で他なく売価も安し
是を諦しも見しるに唯珍奇許に賞じ他なるを強て縁有と

いちご其縁に飾り捨て三月頃より節の場を一生とぞちらばゝでし
麦の穂をかりこゝろ添となり其時を抵となす人もしに飾なり賞して
糸瓜し又むろさき乃梅桃さくら哉賞翫し又二三月になれど人家
も野山も一面にひら飾尽したるまゝにいよく咲ざかりに人を
うかれ出で賞翫ハ実に諺に有る物をかくのことし又参詣往々流行
廢乃有物ゝ又麦乃穂に等しく詠る物をいかにも其廢盃飾
やまで梅さくらなどは古より咲と称して見で野にも山にもて
筆にも有物なれど何乃時の廢盃飾にて俗情に惑ぬの次
又其内で遊会早咲に至る上中下之其品に往々の使命ゝに
なかち伝ちゝ書をもつて次で予が著書瓶花容体全了
詳らかに伝ていゝに略して

器具

挿花の瓶と花枝の取りようて挿器し花と瓶とお応ずれば
いけはなの挿得たりとも醜し然に往々瓶がなくて花毎応じて
依に於て出来難し故く口広きハ大方瓶にて取り応ずと瓶
ともなり口細く痩て高き瓶ハ花取方やわらかにて応せぬ
も瓶の至花瓶を言ふなり尺ちすり五六寸にても一つゝ有て大瓶あて
八九寸より尺に至るもの有を云ても高き花に至るなり銅器あて
又は古物至る製度種にして美なり又は花ちよる順によろし
唐物ハ大方不よろし吾国乃製も古き物は使なり唐山
其ても古き物往宜で又でもなるなりちのくて宣徳成化乃

八卦方瓶（はつけはうへい）　多角にして高く　八卦文あり

壁瓶（へきへい）　形丸くしてちら　うち背ひらし

爵（しやく）　酒器なり　形小ぶりにして三足　口広く　角あり
和名さかづき　香炉とするものなり

犧尊（ぎそん）　腹ふとくて中ちいさく足ひきき
まる花瓶の名として形稍異なる

寶鼎（ほうてい）　まるうち三足のてちいさく口
ひら縁に耳有り　此器を花瓶とし或は香炉に製せし

登（とう）　上ふくらにて口ひろく中ちいさく
下おしひらく

方壺（はうこ）　方にしてちらかし
うち肩なし

素温壺（そうんこ）　ふくらのごとく花生のふかうとあれど燈明をそへし
酒銭さし暮れにてのあり

匾壺（へんこ）　形丸くしてひらたく口細長し　此器を花生とし
此方にて　花生に入れて用

蓍艸方瓶（ぎさうはうへい）　蓍草瓶の方なるをいふ　今此方に
かたちの事にてすこし

花觚（くはこ）　窰なり　銅なり　口ひろく中　ちいさく下またすこしひらく
此方にて広口とよぶ　このもの花生にて今　汲山あり

罍（らい）　口ちいさく頭まろく肩ひろく下ちいさく
文あり

壺（こ）　口ちいさく頭まろくちらかし
うちつまりたるも形なし

此數名一名中　亦小名ありて形小小異あり　皆唐物なる

此方にても舶来今もまた其形様の有といへども小略なるべし
此方にて昔製したるものを左に出す

車軸　まろうちて口ふとし

手桶形　手桶のかたちに造りて銅器なり

碪　まろうちて肩ひろく口ふとし

鼓筒形　胴さきに中ふとく下おしひらく

中蕪　まろく大にうちて口ふとし

柑子口　ふくらに口の形柑子にたとし

杵形　胴さらに下ふとし

是等の形数々は四百年以前に製すといへども其後とかくこれ

製せる形様あらずといへども大方多くは唐物を贋て製したる数多し
又薄端大砂鉢小砂鉢などにて今も製する物なれども是よりて三百年
このかた製せざるなし大砂鉢などは花器にて砂の物の鉢
挿に製したるもののこの文は古物も今もまれにありてちか
ところ手がらに入れたる製様にして銅色も深黒く淡紅銭付文
細密唐物に大方を合せ製して見るに銭と取肱くして粗し
其中にも唐物様にありし物もあれども地文など昔に模して作れ
拙し唐に銅器に彫文を付けたるに銭又金銀などをそろへて打たるものなど
太略くして清器に入るゝに当時も様致は人の好みて製し
流れて製粗とこそいふべし又仕器中に付なし又古きをまた新古
としをならべてよろし　唐山様なる製なる此方にしも舶来

なのさ賞するし夫にはからひて花を挿ておもしろきを宗とすれば
花挿まづ其器を撰し乃其形うつくしく自然に本を有例に
取といへども長短広狭ありてもてはやして用ふべし唐山にも竹筒
をも用ゆと諸書にいへり二重三重乃掛筒にて漢名
竹筒踏壁瓶といふ又花器にて用ゆるも此方にても百年
以来のことなるべし天正乃後を以て今に用たるとぞ
昔ハ薄板をかはり用たることなり当今にいたりて花器に用ゆる
其取様にいたれどもおしなべて瓶乃取と台を応せずしかるに
ふくし置く置するは一二寸より三四寸よりもまで続板の置方
同寸それ乃も置方にいたりて置へき花器にて寸法を瓶
にて応せずして置へきと台にて大方花瓶の応するにもそれなり

亦ある台八木と蝋色黒塗蝋色朱塗などいろいろあれ描金螺鈿
其類あるべくして用ゐること唐山にもとくは花器に用ゐるも有り
諸書にいへることは何れもありてそれぞれを案じて加えて置くべし
凡くいひて置くべしより瓶乃置台にいたりて大小の差別に
丁寧におよぶ事にもいへりて瓶と台と応するなきを又
茶の縁凡とはいふば花角大小しも置いたる引縁よしといへども
のちは人もて広くてもて此ごとき挿花に大なる縁おほく引ば
よき花に瓶と台とよく広くなすとさもあるべし

瓶法

花を瓶に挿て数日数をふるは先水を択ぶべし流れる甘水

夫なるにいつもやうなれども挿花の中にしてこれは秘傳
として授けらるゝはいかにといふに彼んしも其意得よるなり
よりてやうぬ夫て師に傳て知べし然れども今ひろげ流行すれば
其花のとれて挿ぬ人にも知らへ流しきとなり亦牡丹薔薇山梔子
梅海棠なんどは表するも挿むれ花志のうしろとて唐山の書にても
こゝろあれども是れおもひがたし心なしこゝろあるれは永事とを
為てのうら尊きよ和れふまるしむかし挿きまして換は水と其
功もむふくのるべし夫れで手れ家ぐ然よくれ流にもかくるてふ
し亦俗情にて其術なき好人あるはしれる然ぬかさて白くし又
柳我挿て枝より前なり萬山茶花是れを我萬ぬれ木と菊
天花枝を始るなど皆此壹之の戲に等挿のにて花流へ

愛すら流にして除き又れ戲をも夾竹桃に於いてはなほまじへて枝枝
より水をも山吹を用いなば火にて焼き抜き会時なを用て花を切れ
硫黄をも用て萬年青にても又は蝋をもひきなどしてまゝ用ひなば
何ともなくして花をもころもちよろしく雅なるにはまことにてらる所なれども
又價なき花をも集めなどして花をも山吹などして皆虚言ならず惑
為このうらにて

雅意

花を瓶を瓶に挿て瓶の形によりて花園の草木をまじへて
野山の辺にあるも皆あれしなして愛すべき流は皆かたちのまゝで
風雅をもまはりの持てかれはさて心我まゝに此ものにも

他乃さゝはをも笑

燈火をきらし

夜乃具昼席に至

つとめてまゐらふ、

詩歌連歌乃ともがらにのぞみ

紙屑塵ちは

物かげ掃除を怠

頭巾をかぶり引ちらし

瓶水に塵うかむ

捧物をことさらに

こぶりにしをなそれる

障子乃やぶれ

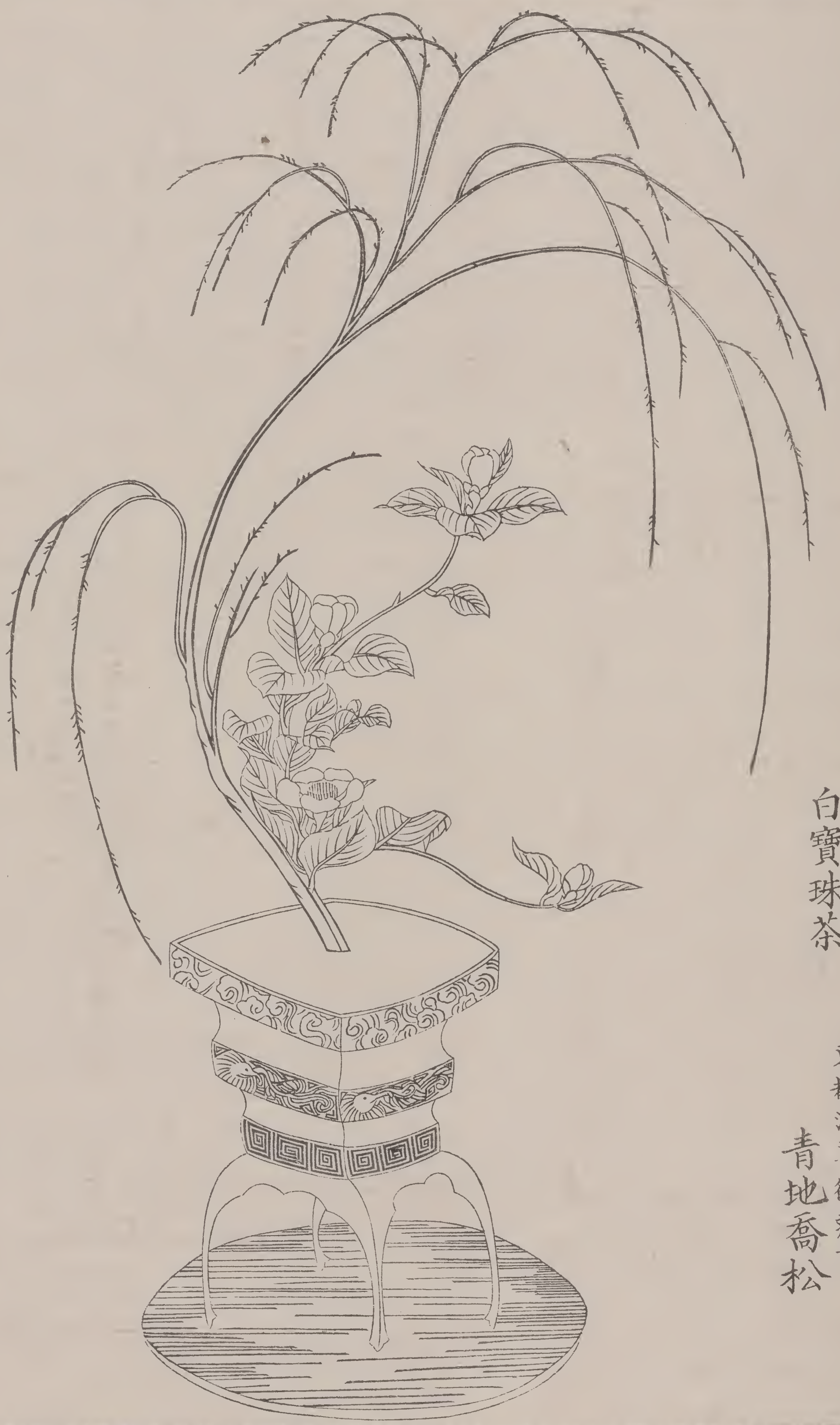
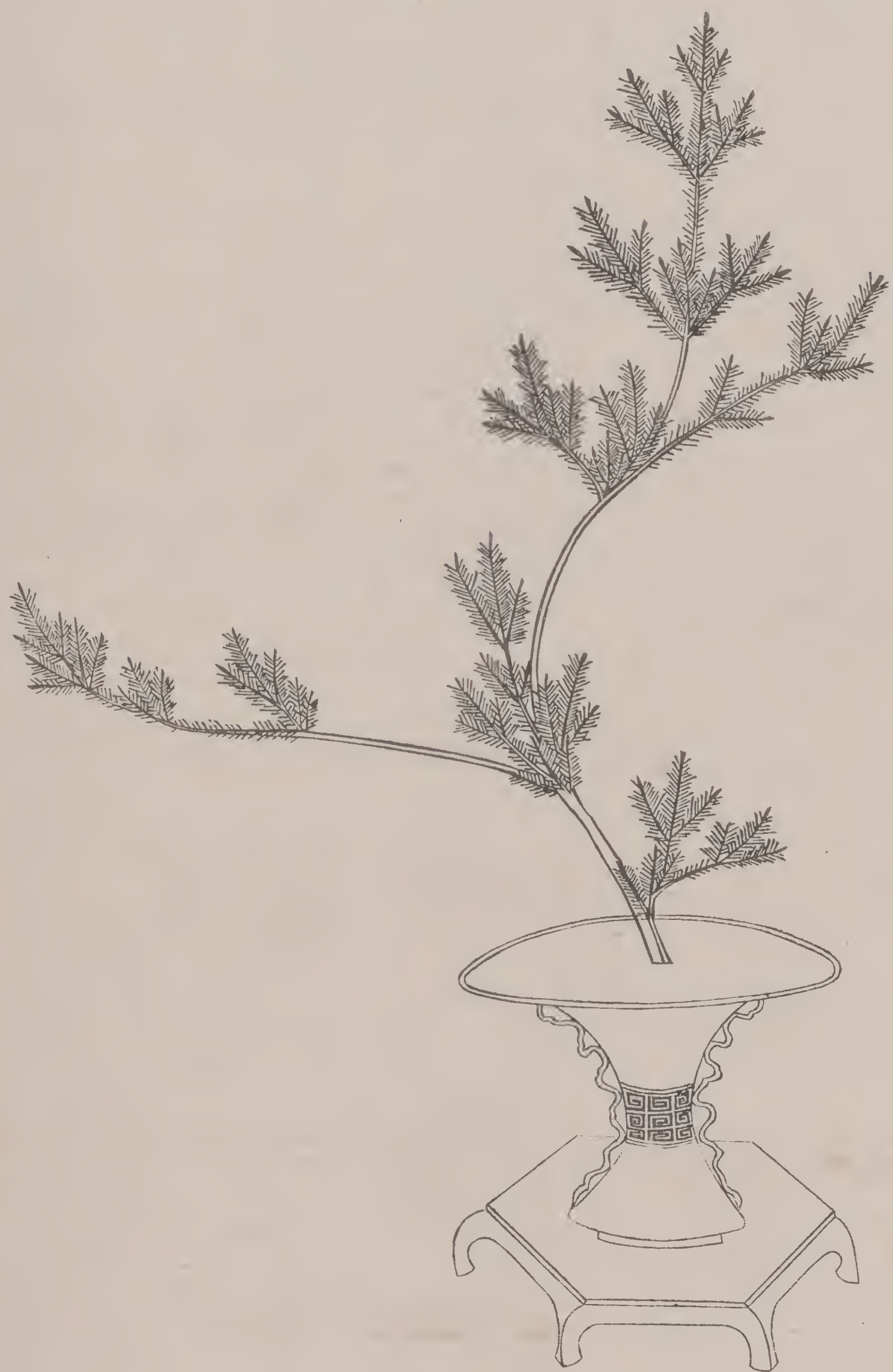
客にむかひて主人睡眠をもよほす

正月

雪蓮（フクジユサウ）

文政七申歳正月廿五日
於不言松舎挿之

紅梅
天保二卯歳正月廿日
嗜山樓裏
相澤源次郎
梅三
白梅
馬盥勒留
天保十一子歳正月十二日挿之
武恩田邑
土志田半兵衛
旭山樓雪朗

白梅（シラウメ）
天保六未歳正月十八日
東都
相澤長四郎
八山樓暮三
二十七
垂柳（シダレヤナギ）
白寶珠茶（シラタマツバキ）
天保二卯正月廿四日
東都淺草御藏前
青地喬松
二十八

柗（マツ）

文政元寅正月元日

嗜山樓裏

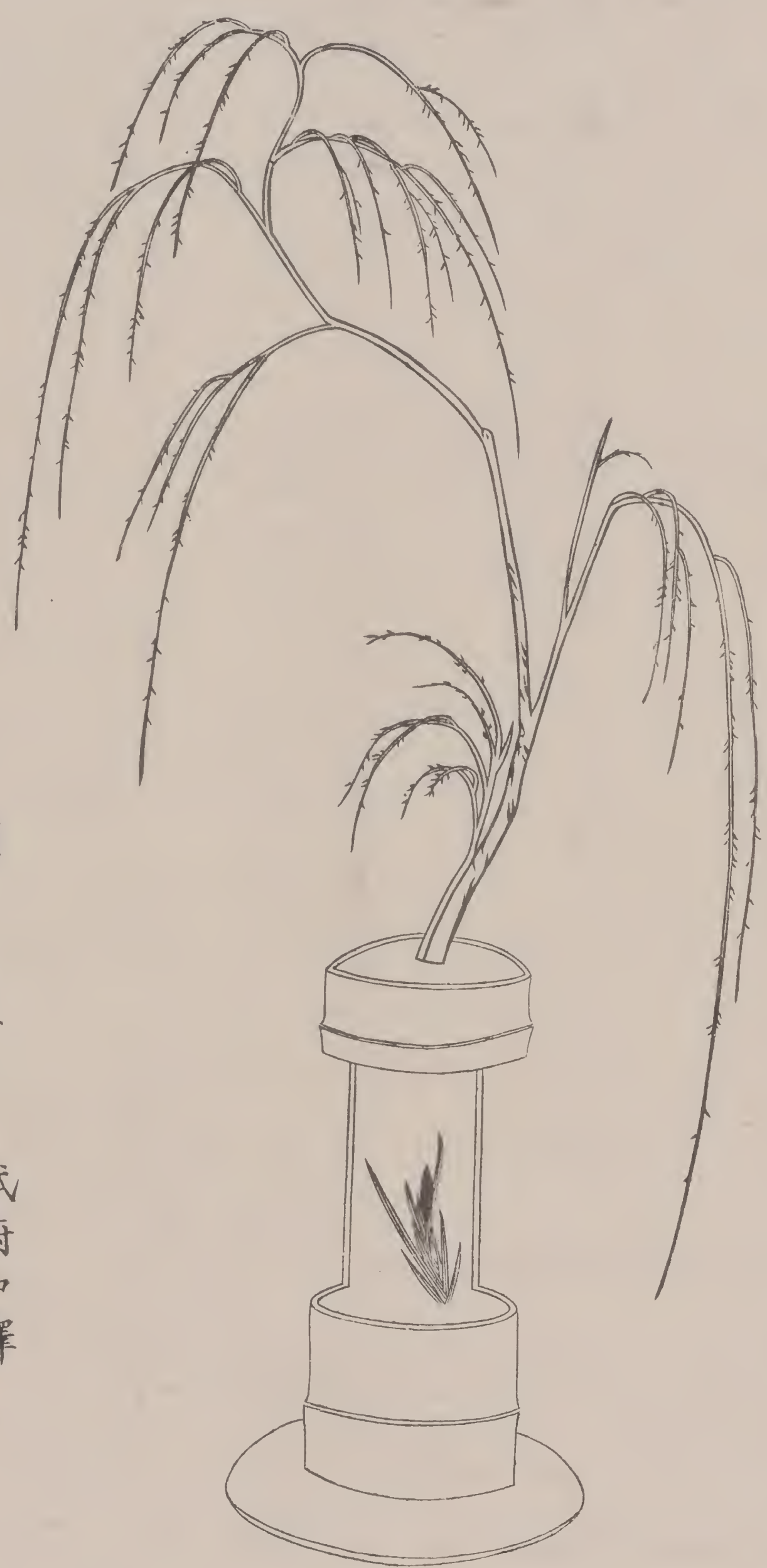
梅七

白梅（シラウメ）

天保二卯正月十日

武青梅町

櫝本榮藏

鍾山樓歆笠

柳ヤナギ
燕子花カキツバタ
武府中驛
矢部甚五左衛門
文政十亥正月廿八日
精草
紅梅
武深大寺邑
富澤忠治郎
天保十二丑正月廿八日
挑遊

白梅（シロウメ）

天保十二丑閏正月十日

武恩田邑

田中昌治郎

鴻齋

白梅

花山樓門人

天保十一子正月八日

武片平邑

夏蒐山

臥雲

一 舩棋 ハラン
天保十一子正月六日
武青梅町
田中八百右衛門
一有
二月
迎春花 ワウバイ
天保十二丑二月六日
於武堅逃水亭挿之

春蘭
天保八戌二月廿二日
武恩田邑
土志田半兵衛
旭山樓雪朗
白梅
天保十一子二月十日
武千賀瀬邑
橋本伴藏
湛露

白梅(シラウメ)

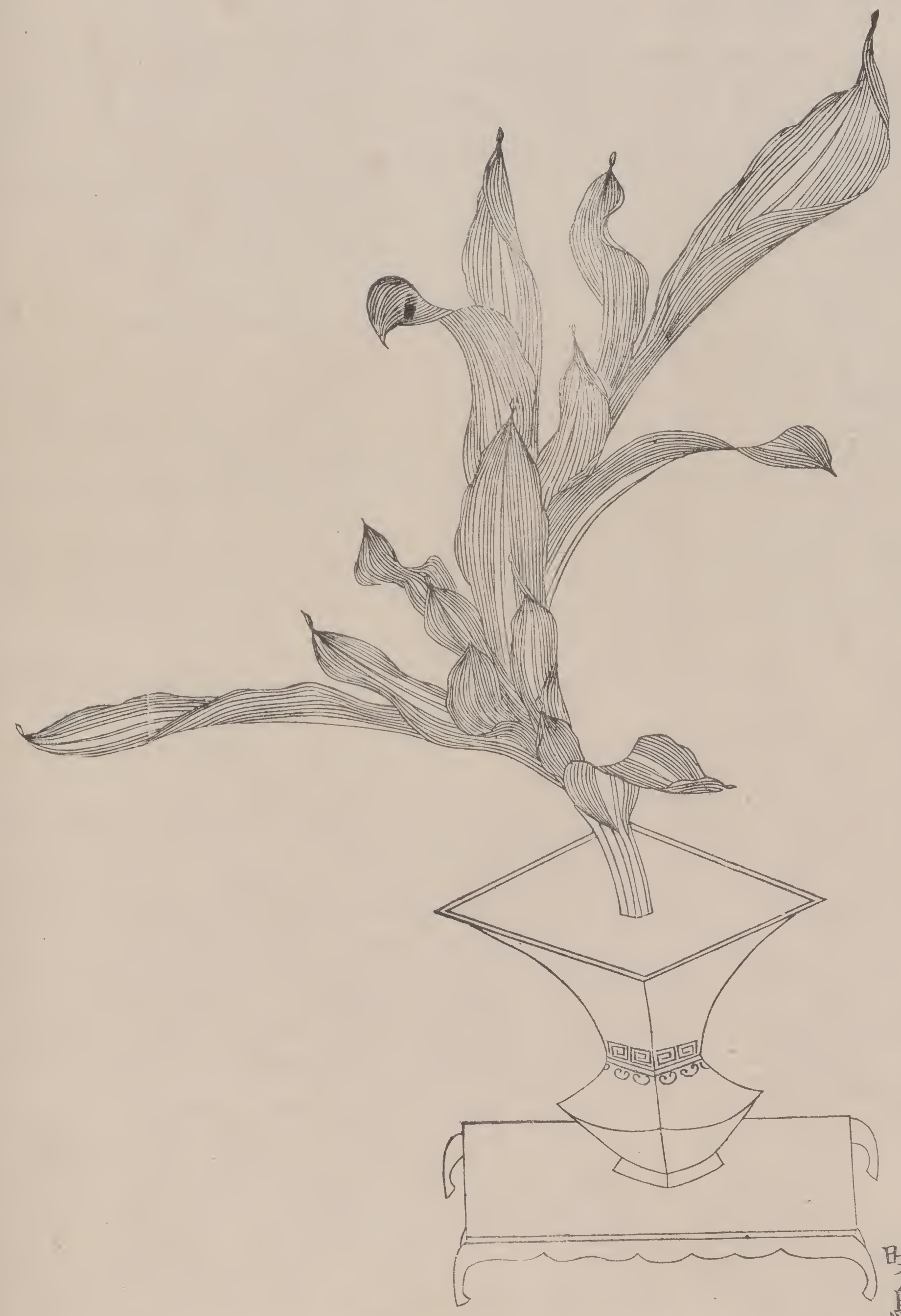
天保二卯二月九日

武堅津田邑
村堅幾吉
印子

山茶花(ツバキ)
緑萼梅(ツキカゲウメ)

天保五午二月三日

武府中驛
田中忠治郎
柏山樓馬的

一船棋（ハラン）
天保十一子二月十日
武金井邑
井山樓門人
神倉甚八
曉鳥
四季開菊（シキザキギク）
燕子花（カキツバタ）
天保十二子二月廿三日
武千賀瀬邑
橋本伴藏
湛露

山茶花（ツバキ）

天保十一子二月廿日

相淵ノ邉邑
龍像寺
泰雲

蕓薹花（ナノハナ）

天保十二丑二月十二日

武押立邑
川崎平藏
絲長

白梅
天保七申二月十二日
梧山樓門人
武山崎邑
少年
鐽溝富治郎
梧風
白梅
天保十亥二月九日
武砂川邑
岡部忠右衛門
花友

山茶花（ツバキ）

天保十一子二月七日　相勝坂邑

中村喜右衛門

溼桂

梨花（ナシハナ）投入

商草花（ハツユリ）

天保十亥二月十八日

武長沼邑

大河原與藏

梅心

武長沼邑
森平藏
圭山樓月人